

## 命のビザを出し続けた

～ 杉原 千 畝 ～



杉原千畝

がっこうかん  
外交官であった杉原千畝は、1939年(昭和14年)7月  
ヨーロッパの小さな国リトアニアの領事館の責任者として家  
族と共に勤めることになりました。

その当時、世界は日本・ドイツ・イタリアを中心とするグル  
ープとイギリス・フランス・アメリカを中心とするグループの二  
つに分かれ対立を深めていました。そして、そのころリトア

ニアの南のポーランドにドイツ軍が攻め込んで、第二次世界大戦  
が始まったのです。ナチスドイツをリードするヒトラーは、ドイツ人がもつともすぐ  
れた民族であるという考えを持ち、反ユダヤ主義を掲げ、ユダヤ人を皆殺しにする  
恐ろしい作戦をすすめていました。

ユダヤ人というだけの理由で強制的に収容所に入れられるだけでなく、銃や毒  
ガスなどで命をうばわれていました。そして、戦争が終わる1945年までに約600  
万人のユダヤ人が犠牲となりました。

1940年7月27日の朝、千畝の  
領事館の前にたくさんの人たち  
が集まっていました。

うす汚れた服をまとった人々の  
目は血ばしっていて、訴えるよう  
な光をたたえていました。中には  
手を合わせて拝んでいる人もい  
ました。



ビザをもとめるユダヤ人たち (八百津町役場資料より)

その人たちは、ポーランドでのナチスの迫害から逃れてきたユダヤ人でした。

その当時ユダヤ人が安全な国へ逃れるただ一つの方法は、日本を通ることであり、そのためには、日本を通過することを許可する証明書であるビザが必要でした。そのビザを求めてユダヤ人たちは集まったのです。

もともと、どこの国の人にも心優しく接する人であった千畝は、『なんとかしてあげたい。救ってあげたい』という気持ちでしたが、『8月中にこの領事館を閉めねばならない。その準備で忙しい』『数人のビザの発行ならともかく、何百人何千人ということになると本国の<sup>がいむしょう</sup>外務省の許可がなければならない』……。

しかし、外務省からの返事は「ユダヤ人が行きたい国からの入国の許可証を持っている人以外にはビザを発行してはならない」というものでした。そんな許可証を持っているユダヤ人はほとんどいませんし、もらえる方法もありません。千畝は何日も悩み続けました。



千畝さんが書いたビザ（八百津町役場資料より）

8月1日朝、この日も領事館の前には、暗いうちからたくさんのユダヤ人たちは静かに集まっていた。やがて、千畝は大きな声で知らせました。

「みなさん方に、日本を通過するビザを発行します。」

それを聞いた人々の表情は電光が走ったように輝きました。だれかれなく抱き合う人、天に向かって手を広げ、神に祈りを捧げる人、小さな子を抱き上げてほほずりするお母さんたち……。

そのビザは千畝がユダヤ人に面接し、一家族に一枚手書きで証明しなければなりません。それからは昼食もぬきに必死でビザを書き続けました。そして、ビザを渡す難民に千畝は励ましの言葉をかけました。「世界は大きな車輪のようなものですから、対立したり、争ったりせずに、みんな手をつなぎ合って、回っていかなければなりません……。」

やがて、千畝はその疲れのため目が赤くなり、ほほもこけて、別人のようになっていました。

そして、とうとう領事館を閉じベルリンに出発する日がやってきました。

1940年9月1日、駅にはたくさんのユダヤ人が見送りに来ていました。千畝からビザを受け取った人や最後までビザを書いてもらおうとする人たちです。千畝は駅にいるわずかな時間を使ってビザを書いていました。

「許してください。みなさん。わたしはこれ以上書くことはできません。みなさんのご無事を祈っています。」……「ありがとう。スギハラ。ありがとう。」「スギハラ。わたしたちはあなたを忘れない。もう一度あなたにお会いしたい。」ユダヤ人たちは汽車と並んで走りながら、泣きながら叫び続けました。

ベルリンに着いた千畝は、すぐに日本大使館へ行き、上司である栗栖大使の指示をおおぎました。外務省の命令に反してビザを発行したことできびしく責任を問われることを覚悟していました。しかし、栗栖大使は何も言われませんでした。人間として、最も大切なものが何であるかがわかっていただいたものと千畝は胸をな

でおろしました。

千畝が発行したビザは2,139枚であり、そのビザにより日本へ行き命の助かったユダヤ人は約6,000人でありました。



1968年には、28年前にリニアでビザを渡したユダヤ人の一人がイスラエル日本大使館員として着任し、千畝と感激<sup>かんげき</sup>の再会を果たしました。さらに、1985年には、イスラエル政府より千畝に最高の賞が贈られました。

1992年には、「愛と人道」の心を貫いた杉原千畝<sup>こうせき</sup>の功績をたたえるため、たくさんの人々の協力により、千畝の生まれ育った岐阜<sup>ぎふ</sup>県のおつ<sup>やおつ</sup>八百津町に「人道の丘公園」や「杉原千畝記念館」が建設されました。



### 《杉原千畝記念館とは、どんなところでしょう》

名古屋駅から電車やバスを乗り継いで岐阜<sup>ぎふ</sup>県の山の中にある自然豊かな八百津町の小高い丘に「杉原千畝記念館」が建っています。

この記念館の展示物の中でぜひ見てもらいたいものがあります。それは、千畝のビザによって助かった多くのユダヤ人たちからの千畝に対する感謝の手紙です。その中の一人アンナ・ミロは「政府の命令<sup>はん</sup>に反し、良心<sup>しん</sup>に従った杉原さんがいなかったら、私たちはこの世に存在していませんでした。私たちの歩み続けた暗い道の中で、杉原さんの星だけが輝<sup>かがや</sup>いていました。」と書かれていました。

千畝が書いたビザの重さと尊<sup>とうと</sup>さは、今でもこの文面からひしひしと私たちの胸に

せま  
迫ってきます。

交通の便<sup>べん</sup>では、決して便利とはいえないこの記念館ですが、それでも年間約2万人の見学者がいるそうです。特に外国からの見学者が多いため、外国語のできるスタッフの方がいつもいるそうです。

ぜひ一度訪<sup>たず</sup>ねて、杉原千畝の思いにふれてみてはいかがでしょうか。

### 参考にさせていただいた本

「杉原千畝物語」—命のビザをありがとう— 杉原幸子・杉原弘樹著

「杉原千畝 —命のビザにたくした願い— 」 小西聖一著

「六千人の命のビザ」 杉原幸子著

### お世話になった方々

杉原千畝記念館の職員の方々

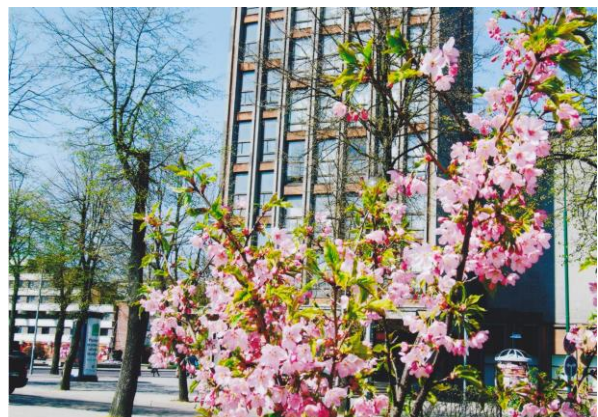
岐阜県八百津町教育委員会

### 杉原千畝記念館

住 所:岐阜県加茂郡

八百津町八百津 1071

電 話:0574-43-2460



2003年 杉原千畝をたたえるために、リトアニアのクライペダ市に愛媛の高岡さんが寄付し、植樹した陽光桜